



作品名 「M坊喫茶 ウェイトレスのキーちゃん」

作 者 千寿院 M坊

著作権 ペットのお寺 千寿院  
たかつき動物霊園

2025年 11月

M坊喫茶

# ウェイトレスの キーちゃん



ペットのお寺

千寿院

たかつき動物霊園



## 千寿院「M坊喫茶」でアルバイト キーちゃんのウェイトレス

キーちゃんがお寺の子供になって1年が過ぎました。  
千寿院では和尚さんと気軽に話せる「M坊喫茶」が開設されており  
キーちゃんはウェイトレスとしてお手伝いしてます。

キーちゃんは喫茶店で聞いたお話を「伝票」の裏にメモしてました。  
これからお話しすることは、そんなキーちゃんがメモしたお話しです。

色んなお話しがミックスジュースの様に混ざっています。  
どんな味がするかは全くわかりませんが  
キーちゃんの「伝票のメモ」をご覧ください。



### 【伝票番号 1.】

少し白髪混じりの紳士が友人と話していた。

東京に白百合学園というカトリック系の学校があるらしい。  
1981年にヨハネパウロ2世が来日し  
その学生と懇談する機会があり、学生が尋ねたらしい

「私たちの通学路に『靖国神社』がありますが、その前を通らないと  
私たちは学校に着く事が出来ません」  
「私たち、生徒はどの様にすべきでしょうか？」

ヨハネパウロ2世は優しくお答えになったそうだ  
「頭を垂れて通りなさい」

靖国問題は令和に成った今でも何かと議論されるが  
当時はもっとデリケートな問題だったと思う

しかしながらその中で、ヨハネパウロ2世は  
「頭を垂れる」と言うその形から学生たちが学び取る事の大切さ  
宗旨を問わず『命』の重さをしらしめたのではないだろうか？  
今でもその学園の生徒は必ず一礼し通っているとのことである。

【伝票番号 2.】

会社の上司と部下の人かな？話をした。  
上司と部下の関係は良好な感じ、時折笑顔が見える

上司の名前はアベさん 部下の人はワダさんらしい

「なあワダ、喜劇役者の藤山寛美って知ってる？」  
「ちょっとわかんないです」

「そうか、昭和の喜劇王の1人でな、アホな役をやらせたら  
天下一の人なんだ」  
「その方がどうかしましたか？」

「うん、その藤山寛美が言った言葉で  
『人間性が伸びる時は必ず芝居も伸びる』と言うのがある」  
「だからワダ、人間性の向上は仕事の質の向上なんだ」  
「逆も真なりで、仕事の質を上げるには  
人間性を上げなきゃダメなんだ。わかるかな？」

「つまりアベ課長、  
『仕事にはその人の人間性が現れる』と言う事ですね！」  
「そうさ！だから仕事に取り組む姿勢、心構えは大切なんだ！」  
アベさんは熱く語っていた。

「ところでワダ、私は君を愛情を持って呼び捨てにしているが  
気に要らないなら遠慮無く言ってくれよな」  
すると真面目な顔でワダさんが言った  
「この間テレビで、歴史に名を残した人は  
皆呼び捨てだと言っていました」  
「信長」「秀吉」「家康」、「リンカーン」、  
「長嶋茂雄」など全員呼び捨てされてます。



「だからアベ課長！私は歴史に名を残すので  
『呼び捨て』歓迎っす！」と言いながら笑ってた。  
とても和やかな雰囲気だった。

### 【伝票番号 3.】

どこかのテーブルから「一水四見(いっすいしけん)」と言う言葉が聞こえてきた。  
何のことか分からずM坊に尋ねてみたが仏教用語のようだ。

同じ『水』(一水)でも、立場や環境などで見方が変わる(四見)と言う例らしい。

人にとっては『水』、魚にとっては『住处』、  
天女には『光り輝く宝石』、餓鬼にとっては『恐ろしい炎』  
『穢れた膿』にも見えるそうだ。  
同じものでもこんなにも姿が変わるものなのか。

認識の主体(見る側)が変われば、認識の対象(見られる側)も変化するのである。

私たちが見ているこの世界すら、ひとつの世界ではないようだ。

私たちは、それぞれの生きてきた『環境』や『教育』や『経験』や  
その他色々なものを身に着け『ひとつの価値観』を持ち、  
物事を見ているのである。  
その見る目(価値観や感性)が変わると物事は逆転する。

もし、あなたが『苦しみ』や『孤独感』で心が壊れそうなら  
その真っ暗な部屋(環境)から外に飛び出してみることも大切  
あなたのその苦しみは、あなたが作り出した『苦しみ』では？

「一水四見」違う角度で見よう、必ず違う何かに出会うはず

中々、自分の見方を変える事が難しいならば  
親しい人や他のひとに聞いてみるのも良いようだ。  
十人十色それぞれの見方を参考にすれば良い。



そこに、「アアこんな見方もあったのか」とか「なんだそうなのか」  
など気付く事もあるだろう。

その中から、自分が前向きに進める「見方」を得れば良い

【伝票番号 4.】

小さな子供さんがお母さんにおねだりしてた。  
何か欲しいものがある様だ……

そう言えば、子供のことを「餓鬼」と呼ぶのを聞いた事がある。

餓鬼は手に入れても満足できず貪り続ける存在とされ、この貪欲な姿が我欲の強い子供の姿に重なることから、  
子供を指す蔑称として定着したらしい。  
そんな「餓鬼」に纏わる法話をM坊がしていた  
色々M坊がアレンジしたらしいが  
「餓鬼のなが箸」と言うお話だ



「餓鬼の世界」では美味しい食べ物が  
目の前に有りながらも、食べようとする  
一瞬のうちに炎となり口に入れることすら出来ない  
腹をすかして苦しむ「餓鬼たち」をみて  
哀れに思ったお釈迦様が「この箸を使って食べなさい」と  
箸を皆に持たせたらしい、だけど  
その箸はなんと1メートルほどある長い箸だった。

餓鬼たちはその箸を使って食べ物を掴むと、  
今迄は全て炎に変わったものが「そのまま美味しいもの」であった。  
餓鬼たちは喜んだが、余りに長い箸なので掴んだ「食べ物」を  
自分の口に運ぶ事が出来ない事に気がついた。  
餓鬼たちは狂わんばかりに何度も何度も自分の口に「食べ物」を  
運ぼうとするが食べられない。

そこに、地蔵さまが来られ「餓鬼」たちに告げられた。  
「どうしてお前たちは『自分のことばかり』なのだ？」  
「なぜ頂いた有難い長箸を「他人の為に使う」事が出来ないのだ？」  
そうなのです。長箸を使いお互いに食べさせれば良いのです。  
お互いが向き合い、自分が掴んだ食べ物を食べさせる。  
それを繰り返すことでお互いが満腹になる。幸せを感じあえるのだ。  
ひと(他人)を思いやる心、感謝を持つ心、「どうぞ」「ありがとう」  
お釈迦さまとお地蔵さまの教えが「餓鬼」を救ったという話だった。

## 【伝票番号 5.】

そう言えば、M坊の法話がもうひとつあった。

千寿院で大切にしている「般若心経」についての話だ。

「般若心経」は「仏説摩訶般若波羅蜜多心経」と言うのが正しいようだが、「般若心経」でちゃんと伝わるほど有名なお経だ。

千寿院ではゆめちゃんも、KINGもミケちゃんもそしてパンダちゃんもちゃんと「般若心経」を読める。だけどキーちゃんは今お勉強中だ。ガンバルぞ！ だからM坊の法話をメモした。



「般若心経」がいつ日本にやって来たかはハッキリとはしていないようだが、あの小野妹子（遣隋使）時代と推測されている。なんと長年に亘り唱え続けているという訳である。

私たちが唱えている「般若心経」は玄奘三蔵の翻訳である。もっと身近に感じて貰うなら、あの「西遊記」つまり孫悟空を従えて中国からインドへと旅した「三蔵法師」のモデルだ。

だから、色々な角度から見ても「般若心経」は身近な存在と言える。

般若心経で有名な言葉は「色即是空、空即是色」であろう。「空」とは「からっぽ」という意味ではなく、実体がない（定まった形がない）ことを指し、空であることではじめて現象界の万物（色）が成立すると説く

全てのものは常に移り変わる。無常、常が無いのである。

M坊は「般若心経」の中で、この色即是空よりも「不増不減」の4文字を取り上げお話しされた。この「不増不減」こそが般若心経の真髄だと。

優れた智慧を身につけられた仏様は  
この世の中のものは全て、「不増不減」であると説かれる。  
つまり、増えたり、減ったりするものではないと。

ある日、M坊はウトウトと昼寝をしていたらしい。  
その時、どこからともなく「般若心経」が聞こえてきて  
この「不増不減」の4文字が何度も頭の中で繰り返し響いていた。  
すると、M坊の身体は細かい光の粒となって、灰を吹きはらう様に  
散って行き、そして何か大きな光の中に消えていった。

でも、その感覚はとても美しく穏やかで安寧を感じた。  
するとまた光の粒が集まり自分の姿となった時、目が覚めた。

M坊はその感覚を今でも覚えているらしい。

その感覚を踏まえて、M坊は次のように話した。

この世のものは、全て「縁起」により成り立ってます。  
縁起とは網の目の様なもので、網の目が存在するのは  
縦の糸、横の糸がそれぞれかかわって誕生したもの。  
どれかひとつでも欠けると、もはや網の目は存在しない。

それと同じ様に、ここに水がある。  
水は鍋に入れられた水として存在している。  
化学的に言うと水は、1つの酸素原子(O)と  
2つの水素原子(H)が結合して水分子(H<sub>2</sub>O)ができている。



これに火と言う縁起が加わると鍋の水はどうなりますか？  
やがて鍋の中からは消えてしまいます。  
そうです水は蒸気と成って消えました。  
余談ですが蒸気となってもその化学式はH<sub>2</sub>Oのままです。  
つまり、カタチが変わっても水なのです。

液体である「水」は私たちは「水」として認識しますが  
目に見えない気体となると私たちは「水」を認識できません。

そこで、もう一度「不増不減」を考えて下さい。

この世のものは初めっから終わりまで何一つ  
「増えたり」「減ったり」してないのです。

私というもの、あなたというもの、これはひとつの縁起で  
今こうして存在しているだけなのです。

それにまた何か新しい縁起(死)が加わると、私もあなたも  
私でなくなり、あなたでなくなるのです。

でも、私を私として形成していたものは消滅する訳ではなく  
また何かとして形成するかも知れません。

仏の知る世界観は大きな意味で「そのまま」なのです。  
何ひとつ増えることも減ることも無い世界なのです。

私たちはその中で、巡り巡っているのです。

「般若心経」を理解しようとしても理解は出来ません。  
理解するよりも先ずは、「般若心経」に興味を持って下さい。  
何でも良いのです。「般若心経」の歴史でも大丈夫。  
「般若心経」のどの言葉でも大丈夫です。  
「般若心経」を好きになり親しみましょう。

そうすれば、「般若心経」の方から近づいてきます。  
そして、それぞれの「般若心経」が育つのです。

たった二百六十余文字のお経が、色々なことを教えてくれます。  
どうかこのお経との出会いを大切にして下さい。  
皆様にとって「般若心経」が救いとなる事を願っています。



## 【伝票番号 6.】

誰かが病気のような。  
多分ご家族の方だろう、難しい顔でお話しされている。  
M坊が「そっとしておいてあげなさい」と言うので  
メモはとらなかった。



ご家族が喫茶店を出られてから、M坊が話しをしてくれた。  
それをメモしておいた。

重い病を患うと自分はもちろん、家族や親しい友人までも  
辛い思いを背負ってしまう。重い病を患っているものにとって  
救いとなるものは何もない。おそらくどんな言葉も届かないだろう。  
病気は身体だけでなく、心を痛めつけるからだ。

一般的に病に関わる心の働き(変化、動き)として、  
否認、怒り、祈り(取引)、絶望、受容(向き合う心)の階段を  
行ったり来たりすると言われている。

心の初期段階では本人は言うまでもなく、皆が心を閉ざすだろう。  
故に、救いも、言葉も、届かない。  
祈り(取引)とは、少し概念が異なり、  
何かと引き換えにこの苦しみにから逃れようとする行為の意味である。

「生老病死」は人が避けることの出来ない「苦しみ」と仏様は  
お説きに成るが、わかっているけどやはり避けたいのが人情だ。

最後の心の状態「受容」と言えども、それで完結ではなく  
そこから未だ揺れ動くのが心だろうと思う。

では、周りのものはどの様に接すればよいのか迷ってしまう。  
当事者が今どんな心の状態なのかを感じ寄り添うしかない。  
そして、当事者からすると寄り添ってくれる方がいるのは  
とても心強いものだと思う。

孤独と言うものは本当に厄介なものだ。  
そいつは決して良い方向に足を向けさせてくれない。

孤独感だけは与えたくない。それが周囲の思いだろう。

しかし、本当に病というものは厄介だ。  
特に私の様に年老いてしまうと、事前準備や覚悟も現実的に必要とされる。

病気になった時の入院費用など「生命保険」は大丈夫？  
死亡した時、葬儀代など子供たちに迷惑にならない様にしてる？  
あれやこれや考えるだけで頭が痛い。  
病気で無いのに心が病んでしまいそうになる。

本当にご病気で苦しんでおられる方やご家族から、お叱りを  
頂く内容だがどうかお許し願いたい。

病気というものは、やはり「カラダ」の悲鳴が「カタチ」と  
成って現れるものなのかも知れない。  
私たちは、やはりカラダのどこかを知らず知らずに  
酷使し、その蓄積が爆発したのだろう。

ある書物に「病気になったら、病気と戦うのでは無く  
友だちになりましょう。」と確か書いてあった。  
これは出来る限り「心」の負担を無くす手段かも知れない。

勤めをしていると、風邪では、なかなか休みにくい。  
何となく「休む」事に罪悪感を感じてしまう。  
でも、そのサイン(風邪)はカラダからのSOSと思い、  
「休む」という選択肢を選んでもよいと思う。  
もちろん、カラダだけではなく、心も休めるのです。



最後に、辛い時悲しい時、話し相手も無くどうしようもない時  
音楽を聴くのも大切な治療法かも知れない。  
何気ない歌詞が心に響く事もあるだろう  
音の調べが心地よくしてくれる事もある。

最後にもうひとつ、「和顔愛語」という言葉があるが  
これは決してひとに向けたことだけで無く、  
時として、自分に向けてカラダと心を労っても良いと思う。

【伝票番号 7.】

華道の先生と生徒さんが、花についてお話しされていた。  
先生が生徒さんに仰った。

花が咲くときは、どんな花でも「咲く」と表現しますよね。  
でも、花がその生涯を終える時はそれぞれ違う表現を使います。

「サクラは散る」「梅は溢れる」「椿は落ちる」  
「牡丹は崩れる」「アサガオはしぼむ」「菊は舞う」

それぞれの花の生涯に相応しい表現を使います。

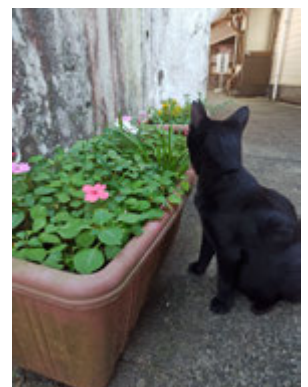
咲いている間、生きている間に  
どう人に見られるか、どう生きるかで終わり方が変わるのよ。  
日本人らしい花に対する情緒ある表現ですね。

生け花のルーツは仏様に花を生けておもてなしをする心から  
始まったのよ。  
でも、その花は仏様だけでなくお参りされる人々の心にも  
美しさや優しさが伝わり、仏様のお言葉を伝えたのよ。  
だから、日本人は花を愛し花と共に生きているの。

誰にでも最後のその時はやってくる。  
薔薇は枯れると表現するでしょう？  
私はね、薔薇の様に「美しく枯れたいわ」  
散り際に香り立つ愛しさも、また趣きのある生き方でしょう？

花の命は短し、恋せよ乙女よ と言いながら  
大笑いされていたのがとても忘れられない。

私(キーちゃん)も、  
ちゃんと花と向き合うことに決めました。



【伝票番号 8.】

連休初日の穏やかな昼下がり、いつも仲良くお参りに来られる  
おじいちゃんとおばあちゃんがお孫さんの事を話していた。

お孫さんは5歳の男の子の様だ。

おじいさんが「うちの孫は変わっているよね？」  
「アンパンマン(TV)が好きなのは分かるけど、  
何でイチオシがああなガキコソの様なホラーマンなんだ？」

おばあさんが笑顔で答えた  
「確かにね、私はアンパンマンかカレーパンマンかドキンちゃん  
ぐらいを好きになるとは思っていましたよ」  
「でも、ホラーマンとわね、さすがですね」



「あのキャラクターのどこがいいんだろう？」とおじいさんが  
おばあさんに尋ねました。

「あの子はね、娘(母親)に言わせると幼いながらに『自分』を『自分の意思』をちゃんとと言えるのよ」

「私たちの時代は、多数決と言うか、民主主義と言うか、  
世間さまの言う事が正しいとされてましたよね」  
「常識と言う物差しが私たちの考えや行動を支配してましたね」

「そうだな、ついつい皆が言う事に合わせていたよなあ」と  
おばあさんの話に頷くおじいさんに続けておばあさんは話した。

「娘に言わせると、今は多様性の時代、  
それは自由に感じられるけど、『自分』と言うものが問われる時代  
そんな世界に生きる子は大変よ」  
「でもあの子(孫)は、自分の感性で『ホラーマン』を選び  
推してるのよ、素晴らしいことだわ」

「なるほど、あの子は私たちが見抜けない『ホラーマン』の魅力に  
気付いていると言うことかな」とおじいさんは頷いていた。

私(キーちゃん)のしっぽも曲がった「カギしっぽ」  
これは私の個性として受け止めれば良いんだ

私はおじいさんとおばあさんの会話を大切に書き留めた。

この世界は広い、  
この広い世界できっと  
カギしっぽを好きな人も  
いるに違いない

大切なことは、  
自分のありのままを見つめること  
そして自分になりたい自分を求め進むこと  
「自分を大切にすること」かも知れない。  
そうした過程で  
感性や他を受け入れる心が育つのだろう。



【ちょっと休憩タイムだよ】



「キィちゃん」と「キーちゃん」について

千寿院のキィちゃんと物語のキーちゃんは  
違うネコなの？

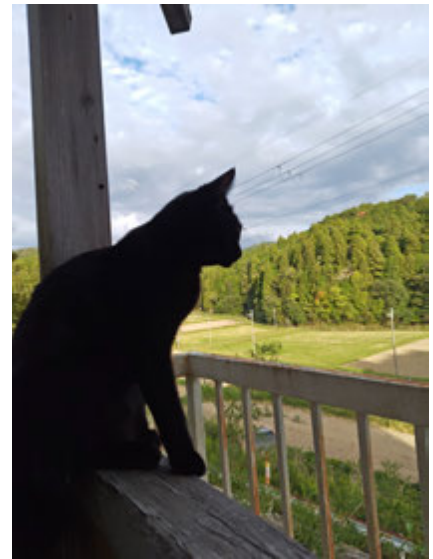
いいえ、「キィちゃんもキーちゃんも  
同じネコちゃんですよ」「キィ(キー)ちゃんはひとりしかいません」

「カギしっぽ」のカギは「Key(鍵)」のことです  
千寿院のキィちゃんは  
「閉じられた心の鍵を開けてくれる子」なのです。

千寿院の黒ネコがリアル「キィちゃん」、そして「キィちゃん」が  
物語の中に入る時は「キーちゃん」となるのです。

どちらも同じ「キィちゃん」なんです

木登りをしているのは「キィちゃん」

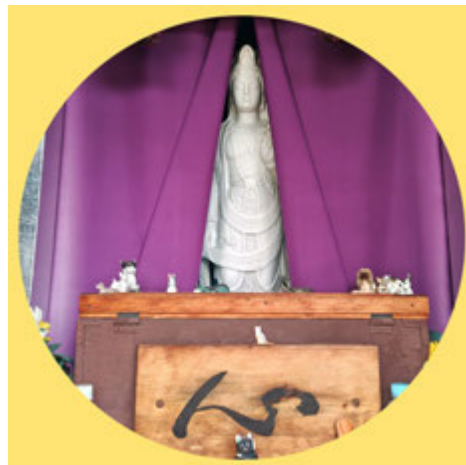


【伝票番号 9.】

M坊が何か話をしている。  
観音様についての法話の様だ。

千寿院では般若心経と観音経を  
創設以来大切にしている。

M坊の話しは決して難しくは無い  
それは大日如来さまが  
「仏法は決して難しいものではない、  
あるべき姿のままを伝えなさい」と  
M坊に仰ったからだ。



M坊はその「あるべき姿」とは何かを数年悩んだとの事だが、  
千寿院にお参りに来られる方、ひとりひとりと接する中で  
大日如来様のお言葉が理解できた様だ。

では、M坊の「観音様」の話を聞いてみましょう。

———本日は共に暮らした(ペットの名前)ちゃんのお供養を  
ご家族皆さんでなさいました。

千寿院では、開経偈のあと「観音経」をお唱えさせていただきます。  
正しくは「南無妙法蓮華経 観世音菩薩 普門品第二十五偈」  
または「世尊偈」と申しますが、  
総括して「観音経」と述べさせていただきます。  
「観音経」そのもののお話しは次回としまして、  
今日は「観音さま」についてお話しさせていただきます。

観音様は、「音」を「観る」と書いて「観音さま」です。  
普通「音」は聞く(聴く)ものですが、  
観音さまは、人々の苦しみを「観じ」、願いを聞き届けて安楽を与える慈悲深い  
仏様なので「観音さま」なのです。  
正式には「観世音菩薩」や「観自在菩薩」と呼ばれ、その名のとおりに、救いを  
求めている人の心の声に耳を傾け、手を差し伸べてくださいます。

そして、観音さまは聖観音(通常の姿)のほか、十一面観音や千手観音、如意輪観音など、様々な姿に変化した姿で祀られています。  
これらの姿は「変化観音」と呼ばれてます。

先程、「キィちゃん」と「キーちゃん」は  
同じ千寿院の黒ネコちゃんだと申しあげましたのと同じ様に、  
色々な観音さまが居られますが、全て同じひとりの「観音さま」です。

では、何故観音さまはそのお姿を「変化」なさるのでしょうか？  
その答えはちゃんと「観音経」にあります。

観音さまは私たちの悩みに合わせ  
姿かたちを変え、済度するということがちゃんと書かれています。

もう少しわかりやすく言うと、私たちはいきなり「観音さま」から  
仏法を教わると、そのお姿に戸惑い、恐れ多く  
説法を理解することが出来ないと思います。

大日如来さまは「仏法が難しいのでは無い、  
自分たちがそれを難しくしているだけ」と常々仰います。

皆さんは本日法要を営まれ、こうして手を合わせておられます。  
素直な気持ち、感謝の気持ちで今は亡きこの子に手を合わせ、  
そして安らかなることを願って居られます。

その感謝の気持ち、この子たちを思いやる心、それこそが  
仏法なのです。

もうひとつ言うなれば、何故皆さんはお寺(千寿院)に来て  
手を合わせられたのでしょうか？

つまり、それはこの子たちの為にではなく、この子たちが  
皆さんをこの仏法の世界に連れて来てくれたのです。  
もう、お気づきになりましたか？  
そうです、  
皆さまにとって「この子たち」は「観音さま」だったのです。

「観音さま」は皆さまが受け入れやすい「この子」の姿となり  
日々お傍で共に暮らしになられていたのです。

あなたが悲しい時、この子はそっとあなたの傍で  
その悲しい心に寄り添ってくれました。  
あなたが嬉しい時、  
この子も溢れんばかりの笑みをあなたに向け共に喜びました。

わかりますか？  
仏様はいつも、どんな時もあなたの傍で  
あなたの心に寄り添って下さるのです。

その事を、この子たちはその生涯を通じ、命の炎が消え去る  
その時まで、いや命の炎が消え去った今もなお、  
あなたの心に寄り添い教えてくれて居るのです。

仏法は決して難しいものではありません。

あなたがこの子を感じる様に、この子がまたあなたを感じる様に  
仏様は同じ思いであなたを見つめておられます。

もう皆さまは仏様の心を知りました。  
仏様の思いを感じておられます。  
その心を大切にしましょう。  
そしてその心で暮らしましょう。

観音さまは「慈愛」の仏様  
「慈愛」は慈悲の心  
その心はあなたの心に宿ります



【伝票番号 10.】

映画好きのおじいさんがM坊と話をしてる。

「男はつらいよ」と言う映画の話だ。

「フーテンの寅さん」がとても人情味溢れる物語の主人公で  
「渥美清」と言う俳優さんが演じていたようだ。

映画好きのおじいさんは「渥美清」の魅力を語っていた。

そんな「渥美清」さんの数ある逸話のひとつだが  
渥美さんは自分の映画を色々な映画館にこっそりと観に行くらしい。  
その訳は、地域によってお客様の反応が違うからだと言う。

具体的には、劇中で美味しいメロンを「寅さん」(渥美清)が  
家に居ない間に家族が食べてしまうシーンがあるのだが、  
新宿と浅草では観客の反応が違うらしい、  
新宿では「笑い」が起こり、  
浅草では「何で寅ちゃんと一緒に食べないんだ！」となるらしい。

渥美さんは「これこそが役者冥利に尽きる」と感じるらしい  
それぞれの「寅ちゃん」が観客それぞれの中に、それぞれの形で居る。  
自分の演じた「フーテンの寅」がちゃんと独り立ちしている。  
そして、渥美さんはそんな「寅ちゃん」をみんなの「寅ちゃん」として  
大切に生涯演じられたと感じる。

渥美清さん個人としても素敵な話が残っている。

ある体の不自由な中学生が渥美さんのファンであり、  
その事をその子のおばあちゃんが渥美さんに手紙を書いたそう。

その手紙を受け取った渥美さんは、その子に直接語りかける様に  
カセットテープに自分の生の声で返事を録音し届けた。

手紙だから、手紙で返すのでは無く  
自分の思いを言葉として伝えたところに「渥美清」の凄さを感じる。

全てが真剣勝負であり、相手をどれだけ思いやれるかである。

そのカセットの内容は  
自分の生い立ちを含め、自分もひ弱で病気がちで家族に迷惑ばかり  
掛けていたことや、その子をただ励ますだけでなく  
家族への感謝、命の尊さ、生きる勇気、など全てひとつひとつ  
丁寧に優しく語りかける内容であった。

そして、締めくくりは  
「おじさんも、映画やテレビに出るとき、〇〇君のことを思い出します。わざわざお手紙をくださったおばあちゃん、それから一生懸命働いてるお父さんに、〇〇君からよろしくお伝えください。それでは、さよなら」とその子との縁が続くことを伝えながら、ちゃんとその子から  
家族へ「感謝」を伝える手だても残している。  
このカセットを聞いた山田洋次さん(男はつらいよの監督)は  
「完璧な便り」と仰っていた。

そんな渥美清さんにも「死」は訪れます。

その最期の言葉は奥さんに遺されます  
「おれの痩せ細った死に顔を、  
誰にも見せずに、家族だけで荼毘にしてくれ」

渥美清さんは「役者」のままでこの世から去ること  
「フーテンの寅さん」は今も旅を続けている、  
渥美清さんの徹底した演技演出なのです。

実際にお亡くなりになった事は、  
暫く誰も知らなかったそうだ。  
最後の最後までファンへの思いを大切にされたそんな話だった。



【伝票番号 11.】

今日は雨、M坊喫茶も開店休業。  
M坊がホットミルクを作ってくれた。  
一緒に飲みながら話をしたのでメモをした。

ねえキーちゃん  
「人生は重き荷を負いて、遠き道を行くがごとし」と  
言う言葉知ってる？

「M坊、知ってるよ。徳川家康の名言でしょ」  
「ほう、よく知ってるね。さすが、キーちゃん」

では、これにちょっとプラスしてお話しをするね

むかし、むかし  
お釈迦さまが、この現世におられた時のお話し……

ある旅人が、重い荷物を持ってながい道を歩いてました。  
旅人は、その重い荷物に耐え切れず、お釈迦さまにお願いをした。  
「お釈迦さま、私はこれからまだまだ旅を続ける者です。  
これからの道程を考えると、この重い荷物がとても辛いです」  
「どうか、お釈迦さま『軽い荷物』に交換して貰えませんか？」と  
涙ながらに訴えた。

お釈迦さまは、優しい笑顔で  
「旅人よ、私の神通力で色々な荷物をここに出してあげよう」  
「その中から、自分の気に入った荷物を持っていくが良い」  
旅人はとても喜びました。「お釈迦さま、ありがとうございます」  
「でも、旅人よその前に『お茶』を一口飲んで休みなさい」と  
一杯のお茶をお釈迦さまは旅人に差し出したのでした。

そのお茶をゆっくりと飲み、一息ついたところで  
お釈迦さまが旅人をお呼びになられた。



「待たせたな、この部屋の荷物、どれでも良いから選んで  
持って行きなさい」と部屋のドアを開くと  
部屋一杯に荷物が置かれていた。  
旅人は端から端までひとつずつ「荷物」を抱えては降ろし  
どれが良いのか確かめながら選んでおりました。  
そして、ひとつの「荷物」を旅人は選び  
「お釈迦さま、これが自分にぴったりと合います」  
「すみませんが、この荷物を持って行きます」  
「お釈迦さま、本当にありがとうございます」  
「お世話になりました」と笑顔で旅を始めました。



その一部始終を見ていたお釈迦さまのお弟子さんが  
「世尊（お釈迦）、あの荷物は何が入っておりますか？」と  
尋ねたところ、お釈迦さまは優しく「私にはわかりません」  
「なぜなら、あの荷物は  
初めから旅人が背負っていた『荷物』なのだから」  
「私が用意した『荷物』ではありません」  
驚くお弟子さんに、更に優しく説かれました。  
「人は、その人生の道程でついつい他人の『荷物』が良く見えたり、  
軽く見えたり、羨ましく思ったり、色んなことを比べたりして  
自分の荷物を重たくかんじたりする」  
「しかし、それはどこまで行っても『他人の荷物』であり  
決して軽いものではないんだよ」  
「自分が背負う荷物は、自分にだけ背負える『荷物』なのだ」  
「だから、あの旅人も結局は『自分の荷物』が一番気に入ったのさ」  
「でも世尊、あの者（旅人）は喜んで出て行きました」  
「それはどうしてでしょうか？」とお弟子さんは尋ねた。  
「それは、荷物が軽くなったのではなく」  
「一杯のお茶で『気持ち』が軽くなったのだよ」  
「人生は長い短いでは無い、どんな気持ちで歩むかだよ」  
「人生の途中で『心』が疲れたら、『お茶』を一杯飲みなさい」  
「お茶を一杯飲む時間は、決してムダな時間とはならない」

そして、M坊はホットミルクをもう一杯差し出したのでした。

【伝票番号 12.】

M坊喫茶の開店前、気持ち良くお話が出来る様にと  
二人で本堂の掃除をしていた時、  
掃除のお話をM坊がしてくれたのでメモをした。

お釈迦さまのお弟子さんに「チューラパンタカ」と言う人がいた。  
彼は、幾ら説法を聞いても理解出来ず、  
何ひとつ覚えることができなかった。  
後から来た弟子たちにも先を越されたチューラパンタカは  
お釈迦さまに涙ながらに申し出た。  
「世尊(お釈迦さま)、私は世尊の弟子として恥ずかしく、  
世尊のお傍に居るべきではありません」  
それを聞いたお釈迦さまは、  
「恥ずべきことは無い、これよりアナタに任せたい事がある」  
「このほうきで、アナタの目につくところ全て掃除してほしい」  
そして、掃除をしながら  
「塵(ちり)を払(はら)い、垢(あか)を除(のぞ)く」と  
お唱えしなさい。「わかりましたか？」と仰って掃除道具を渡された。



チューラパンタカは毎日毎日、片時も休まずに掃除をし、  
「塵を払い、垢を除く」と唱え続けた。  
彼の掃除はとても丁寧で誰一人として真似ることは出来なかった。  
ある日、チューラパンタカがいつもの様に掃除をしていた時、  
子どもたちが掃除を終えた場所を走り回って足跡だらけにした。  
彼は思わず子どもたちを叱りつけた。  
大声で怒鳴った時、チューラパンタカはハッと気づいた。

「なんと『怒り』の醜いことか！」  
「汚れたならば、また綺麗にすれば良い」  
「心を乱し『怒り』を生んだことは、自分の心が汚れているからだ」  
「本当に『塵』『垢』を除くべきは『我が心』では無いか！」  
それからの彼は心の掃除を行い、どの弟子よりも精進し、誰からも親しまれ  
唯一無二の弟子となったとのことだ。

【伝票番号 13.】

本日のM坊の喫茶店には  
M坊のお友だちが来てくれました。

お経について話をしていた。

M坊は言った  
そもそも、「お経」ってなんだろうね  
仏様の教え、教典、と考えるのが普通だよ。  
でもボクはそれだけじゃつまらない



お経は、物語であり、詩であり、楽譜であり、絵画であり、仏様であり  
台本であり、テキストであり、手紙であると思ってる。

すると友だちは  
「おいおい、物語とか詩までは理解出来るが、後は暴走だね」  
と笑いながら言った。

確かにそうだね、僕たちが(僧侶になるための)学生の頃は  
先生に言われるまま声を出し、音程を合わせ、何度も繰り返し  
お経を唱えたものね。その都度何度も叱られた。

でも、ボクはここに来て思う様になったんだ  
お経を唱えるのに「うまい」「ヘタ」「正解」「誤り」など  
無いんだとね

ここにお参りされる方も、「心経」をお唱えされるけど  
中には辿々しくお唱えされる方もいる。  
それを笑うものは誰もいない。  
今は亡きこの子たちへの家族としての思いやカタチだよ。  
それは「手紙」であり「詩」であり「感謝の言葉」なんだよ。  
我々僧侶はその「心」「感謝」を伝える代弁者であり  
亡くなった子への供養は勿論、お参りに来られた家族にも  
仏様の思いをそれぞれに伝えなければならない。  
僧侶は自分の言葉として伝えるんだよ

学生時代は常に「心をこめてお唱えする」「姿勢を正す」  
「読経は間違えないように」  
「拍を取り導師に合わせ一緒にお唱えする」と何度も言われた。

実はこの間TVで「昭和の名曲」というのをみた。  
山口百恵の秋桜に纏わるエピソードが語られていた。  
「秋桜」はさだまさしが、当時18歳の山口百恵に贈った曲だ。  
山口百恵はこの曲を貰った時、嫁ぐ娘と母親のその思いや背景に対し  
「感情移入がとても難しい、自分に歌えるのか」と悩んだらしい。

やはり一流の歌手は、ひとつひとつの「歌詞」の意味や思い  
そして、その場面や状況などをリアルに思い浮かべながら  
曲にのせて謳い上げるのだ。  
同じ様にオーケストラの指揮者は  
その楽譜への作曲者の思いや心の状況や時代背景など  
あらゆることを探り曲のイメージを具現化する。

だから、お経をお唱えするとき  
その意味や物語、どんな思いがこの経のなかに詰まっているのか  
自分なりにそのお経と向き合いお唱えし、  
亡くなったこの子が歩んだ人生も想像し思い浮かべなければ  
亡くなった子たちにはもちろん、お供養なされた方へは響かない。  
ボクは法要のとき、全身全霊で感覚を研ぎ澄ませる  
するとやはり、目では見えないものが見え  
耳では聞こえないものが聞こえてくる。  
それは、決して自分だけで成立するものでは無い  
亡くなっ子、お供養をされる家族、そして厳修する者が共鳴し  
ひとつになることが大切。  
ここの素晴らしさは、亡くなっ子への家族の思いと感謝、  
そして亡くなった子たちからの感謝の思いが  
ちゃんと交わり重なるところだと思う。



二人の話はまだまだ尽きない様子だった。

【伝票番号 14.】

ネットニュースを読みながら、ご夫婦でお話しされている。

「霊柩車」の話の様だ。

ご主人が「私のおばあちゃんの葬儀は自宅で、霊柩車も立派な屋根がついたクルマだったよ」

「時代の流れというか、まさかその様な霊柩車は今は無いのか」



ニュースには次のような理由が書かれていた

高度経済成長期に宮型霊柩車が流行したが、

衰退の原因の一つに「苦情」がある。目立つ宮型霊柩車が自宅近くを通ると「縁起が悪い」などと近隣住民から苦情が寄せられたことがあったという。

さらに2020年以降のコロナ禍で、葬儀の小規模化や低価格化が進み、宮型霊柩車の需要は一段と減った。

代わって「主流」になったのが、一般車と見分けがつかないバン型霊柩車だ。

コロナ後は通夜をしない「一日葬」や火葬のみの「直葬」が増え、葬儀も少人数で済ませることが多くなったためだ。

ニュースを一緒に読んでいた奥さんは

「ほとんど、今は家族葬ですからね」「お金も掛けられないしね」

と答えながら、「でも、『縁起が悪い』は困ったものね」

「今は近所付き合いも減ってきているからね」

「隣の方が孤独死されても気づかれない事もあるしね」と

ご主人も少し嘆いておられた。

それを聞いていたM坊が話しに加わった。

ネット以前は、何も知らない状態から相手について、  
時間や労力をかけて徐々に情報を集めていくことが、  
人間関係の構築に不可欠でした。  
そうした努力が人々の距離を近づけていたわけです。  
ご近所さんも、日々の挨拶やちょっとしたお付き合いで  
理解を深めて行くのですが、今は知りたい情報だけをネットで知り  
身近な人への関心は薄れているのだと感じます。

そんな希薄状況が、霊柩車が家の前を通ると「縁起が悪い」とか  
苦情を生むのでしょうか。本当に住みにくい世の中となりました。

しかし、そんな時代に有りながらペットの存在は大きいと思います。  
例えば、ワンちゃんを散歩に連れて行けば、ワンちゃんを通じ  
ご近所さんと会話も生まれますし、同じペットの話題で盛り上がりも  
します。  
何よりも、ペットとの関係を構築するためには努力が必要です。  
まさに、今の我々に欠如しているもの全てをこの子たちが  
教えてくれてます。

ペットの存在は社会的交流の促進だけでなく、癒し、心の健康維持  
そして命の責任を学ぶ教育的役割など多岐にわたり、  
無条件の愛情で孤独感を軽減し、生活に彩りと目的を与え、  
ストレス軽減に貢献してくれるのです。

「ペットってホント大切ですよ」ってみんなで頷いてた。



【伝票番号 15.】

小学3年生ぐらいの男の子が、お父さんに尋ねていた。

「お父さん、『仏様』はいるの？」

お父さんは「もちろんいるよ、ちゃんと見てるよ」と答えたが  
男の子は「ふ～ん」と言って半信半疑の様子だった。

同じ質問をM坊に(キーちゃんが)してみた。

M坊はキーちゃんに答えてくれた。

M坊があるお寺で修行していた頃、1日の修行を終えて  
本堂で後片付けをしていた。掃除も終えて電気も消して  
お堂を出たあと、忘れ物に気づいて本堂に戻り  
本堂の扉を開けたその時、直径1メートルはある「大きな光の玉」が  
お堂の中をふわりふわりと漂っているのを見た。  
例えるならば、シャボン玉の様な穏やかな輝きが  
真っ暗闇の中で浮いていた。

その事を、先生(師匠)に伝えたら  
「それこそが『仏様』だと教えられた」

曼荼羅で『仏様』が描かれているが  
まさにその「大きな光の玉」だった

先生が仰るには  
「全て『想像』で描かれたものではない」  
「全てそのままに『存在』するのだ」と



M坊はその光の玉の中の『お姿』までは見ることは出来なかったが  
対面させて頂いた「感謝の気持ちと喜び」で胸が熱くなった。

M坊は「間違い無く『仏様』はいらっしゃる」と力強く言った。

【伝票番号 16.】

幼い子どもがお母さんに「ないしょのお話し」をしていた。

何のことかはわからない  
でも、お母さんの笑顔から  
素敵な話だろうと  
何となく気になった。

後でM坊にその出来事を  
伝えたら、  
優しい笑顔で、  
ないしょの話をしてくれた。



あのねキーちゃん、  
「ないしょ」って言葉は仏教用語の「内証」「自内証」から  
生まれたんだよ。  
如来の悟りの境地で人間が容易に推測できない仏意のことなんだ。  
それが「秘密」と結びつき、「ないしょ」と成ったんだよ

では、キーちゃんに「ないしょ」の話をしようね。

千寿院は四季を通じて、色々な姿に変わるよね。  
春の千寿院の話をするけど、ないしょだよ。  
「えー！M坊。やっぱりないしょばなして、何かドキドキする」って  
思わず言ってしまうちょっと恥ずかしかった。

千寿院は  
春を迎えると色とりどりの花が咲きます。  
私(キーちゃん)はどの花も色やカタチが様々でみんな好きです。

M坊はその花の秘密を教えてくれたのです。



皆さんご存知の通り、千寿院にはみなさんが愛した「家族」が眠っています。

M坊が言うには、春のお彼岸の時期になると色々な花がところ狭しと顔を出し、みなさんがお参りされるのを待っています。

つまり、その花ひとつひとつが、今は亡き「子どもたち」の清き魂の現れなんだということだった。

お参りされるご家族に、  
「ありがとう、ここにいるよ」と伝えているのです。

お彼岸は、皆さんと「この子」たちの心が一番近づく時なのです。

どうか、お参りされたら「大切な子」を探してあげて下さい。

あなたの心に響き伝わる「花」を見つけてあげて下さい。  
きっと、あなただけの「素敵な花」が咲いています。  
そして見つけても、あなただけの「ないしょ」にして下さい。

【伝票番号 17.】

M坊と若いご夫婦が話し出した。  
他愛もない雑談の様だが、メモをしておいた。

M坊がため息混じりで、  
「お寺や神社には『樹齢数百年、数千年の老木が有ります』ね  
そして、それらは『神木』と呼ばれ大切にされる」  
ここにも1人の年寄りの僧侶がおるが  
「残念ながら『神木』どころか『老僧』でも無く  
『老害』と呼ばれる。困った年齢になりました。」と言った。

仏教の経典『大智度論(だいちどろん)』の中で、  
人生の段階のあり方を説く一節、  
「女人之体、幼則従父母、少則従夫、老則従子(女性は幼い時は親に、若い時は夫に、老いては子に従う)」というのがあるが、「女」を「人」として読み解くならば、「幼い時は大人の意見も聞きなさい、  
若い時は友人や仲間を大切にし、年老いたならば年下の声も聞きなさい」となるのかも知れませんね。お互い壁や溝を感じる時は、  
「子供叱るな来た道じゃ、年寄り笑うな行く道じゃ、来た道行く道  
二人旅、これから通る今日の道、通り直しのできぬ道」という教典でも無く作者不明の詩の通り、年輪を重ねるのはみな同じと考え、  
人生というものは大差ないと思うのが良い。確かに年齢を重ねると  
衰えが増しますが、お互い「我を張った」ところで、何かが変わる  
事も無さそうです。  
「神木」と「老木」の違いは何でしょう。その立ち位置や姿カタチ  
趣きなどかも知れませんが、「老木」の枝にも鳥たちが巣を作り  
落ちた実を動物たちが食し、「老木」の根本にも花が咲く。

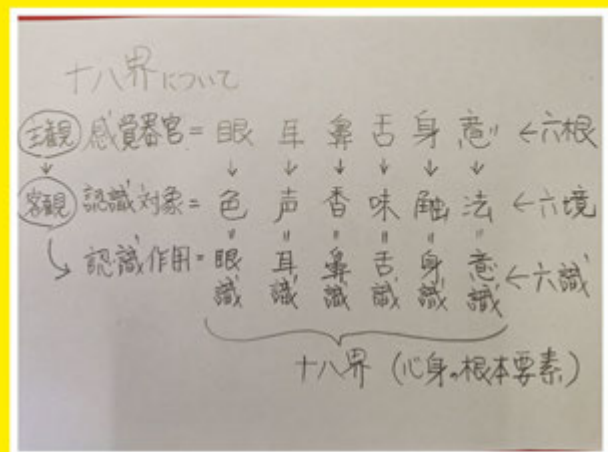
聖徳太子の「和を以て貴しとなす」はそんな世界観から生まれた  
言葉と感じるのです。

## 【伝票番号 18.】

M坊に18枚目の伝票をみせたら、  
「キーちゃん、十八という数字にちなんで『十八界』について  
お話しようね」と言ってくれたのでメモをした。

十八界とは「心身の根本要素」つまりキーちゃんの心の働きを  
仏教はちゃんと説いているんだよ。  
仏教の凄いところは、ただ単に「こうしなさい」と説くだけでなく  
「人間そのもの」について深く説いているところにある。  
広く言えば「森羅万象」「宇宙を含むこの世の全て」に言及して説いている。  
だから、仏教は難しいとなるのかもしれないね。

十八界をまとめて図にしてみよう



眼で見て  
「花」を  
認識

眼、耳、鼻、舌、身、意を「六根」  
色、声、香、味、触、法を「六境」  
眼識、耳識、鼻識、舌識、身識、意識を「六識」といい

「六根」「六境」「六識」の3つ合わせて「十八界」なんだ。

「六根」は感覚を知る「器官」  
つまり、「眼」で「花」を見て、花を認識するよね  
それぞれの器官で何を対象として認識するかを「十八界」で  
説明している。「六根」「六境」は般若心経でもお馴染みだね

「M坊！（キーちゃんは）『般若心経』勉強したからわかるよ」  
「無眼耳鼻舌身意（むーげんにーびーぜっしんにー）」  
「無色聲香味觸法（むーしきしょうこうみーそくほう）」だね！

「えらいぞ！ キーちゃん ちゃんと『心経』を勉強してるね」

これら「十八界」全て『空』と説くのが「心経」の凄さだね。

残念ながらまだ我々はこの「色」の世界から解脱できてないけれど、  
「こころ」の置き方ひとつで「世界」は変わるよね。  
それは「一水四見」などで話したよね。

キーちゃんのこの「伝票のメモ」もその時その時で感じ方も変わるよ  
だから、キーちゃんこのメモは大切にしておいて

「ウェイトレスのキーちゃん」が残したメモ  
アナタにはどんな味がしましたか？  
まだまだメモは有るようですが  
またどこかでお会いできると信じて………  
"See you again"

